

「凜として咲いた名前は」

平木健典

登場人物表

藤山倫之介（39） 運送員

水西凛子（9） 配達先の子ども

仙波星良（39） 倫之介の元恋人

水西亜矢（30） 凛子の母

木岡義之（50） 倫之介の上司

藤山弘美（34） 倫之介の元妻

藤山詩織（10） 倫之介の娘

住人 A

住人 B

男 A

社員 A

母親

娘

その他

○佐倉団地・全景

五階建ての小高い丘にある大規模集合住宅団地。郊外には駐車場や公園が併設されている。木々には葉がついておらず、曇天の空模様は昼間でも薄暗い印象。

○同・駐車場

団地の駐車場スペースにて運送員の制服姿の藤山倫之介（39）がトラックの荷台に荷物を載せている。

倫之介、寒さに手をすり合わせながら、うんざりした顔で荷台を見つめる。トラックの中には山のように荷物が積み重なっている。

倫之介「これ全部、不在とか」

倫之介、失笑する。

笑い声が聞こえ、団地内にある公園の方を見る倫之介。子どもが母親に駆け寄り、母親が受け止めて抱きしめてい

る光景。

倫之介、その親子を見て寂しく微笑む。
トラックの近く、団地内の通りから同じように公園の親子を見ている水西凜子（9）の姿がある。

倫之介と凜子、同時に目が合う。

凜子、焦ったように倫之介に一礼して団地の中へ去って行く。

倫之介、一礼を返しながら凜子を眼で追うも、ふと腕時計を見て

倫之介「やべ、時間だ」

倫之介、トラックに急いで乗り込み発進させる。

○同

去っていくトラックを隠れながら見つめている凜子。

トラック後方の荷台には藤山倫之介のネームプレートが入っている。

凜子「藤山、倫……之介」

凜子、公園で遊んでいる親子を切ない顔で一瞥してからその場を後にする。

○同（夜）

日が落ちて暗くなった団地の駐車場にトラックが止まっている。

倫之介、大量の荷物を乗せた手押し台車を勢いよく押して走る。

倫之介「在宅しててくださいよ、皆様」

○同・ゴミ捨て場前（夜）

倫之介、台車を押しながらフェンスで囲まれたゴミ置き場の前を通り、立ち止まる。

ゴミ捨て場はゴミ袋がいくつも開けられてゴミが散乱して酷い有様。

倫之介「なんじゃこりゃ」

倫之介、凜子がゴミを漁っているのを見つける。

凜子、倫之介には気付かず、ゴミ袋の

中から菓子パンを一つ見つけて微笑む。

倫之介、凜子を啞然と見つめる。

凜子、はっとして倫之介に気付き、持っていた菓子パンを後ろ手に隠す。

見つめ合い、沈黙する一同。

倫之介「えっと、君は昼間の」

凜子、気まずそうにしながら一目散に走って倫之介の脇を通り抜ける。

倫之介「あ、ちょっ」

走り去る凜子。

倫之介、啞然として凜子の背中を見送ってから、散らかったままのゴミ捨て場を一瞥する。

倫之介「……まあ、さすがに関係ないよな」

倫之介、台車を押して去ろうとするも立ち止まって腕時計を見る。

倫之介「あー、もうっ」

倫之介、フェンスの中に入りゴミを片付け始める。

○同（夜）

一人、散らかったゴミを片付けている
倫之介。

倫之介「あの子ども、派手に散らかしやがってからに」

倫之介、凜子が漁っていたゴミ袋の中を見つめる。空になっている菓子パンの袋がいくつか入っている。

○（フラッシュ）同（夜）

凜子、持っていた菓子パンを後ろ手に隠す。

○元の佐倉団地・ゴミ捨て場（夜）

倫之介、ゴミ袋を見つめて

倫之介「この中から……取ってたよな」

住人Aの声「あの、何してるんですか？」

倫之介「え？」

住人A、フェンスの外から訝しげに倫之介を見つめている。

倫之介、しどろもどろに

倫之介「あぁいや……かなり荒らされてたもの
ですから、片付けを」

住人A、外にある台車の荷物を一瞥し
ながら不満そうな顔で去って行く。

倫之介「……ですよね」

倫之介、ため息をついてからゴミを急
いで片付けていく。

○磐田急便営業所・外観（夜）

トラックが何台も止まっている集積所。

○同・営業室（夜）

デスクを挟み、椅子に座っている木岡
義之（50）と恐縮気味に立っている
倫之介。

木岡「それで配達が残ってるにも関わらず、
人様のゴミ捨て場を片付けていたと？」

倫之介「……はい」

木岡、苛立ち気に机を指でコツコツと

叩きながら

木岡「ついさっきクレームのお電話を頂戴したときは耳を疑ったな。うちはいつからゴミ掃除が仕事になったんだ？」

倫之介「……」

木岡「逆の立場でさ、嫌な気持ちにならない？　配達そっちのけでしかもゴミ漁られるとかさ。その汚れた手で配達される気持ちとか、想像できない？」

倫之介「いえ。自分の不注意でした。申し訳ありません」

倫之介、頭を下げる。

木岡、不愉快そうに

木岡「そんなんだから、嫁と娘に逃げられるんだろ。もっとしっかりやってくれ」

倫之介「はい、すみません」

倫之介、頭を下げながらも顔を引きつけている。

○仙波バッティングセンター・外観（夜）

駐車場を併設した中規模バッティングセンター。

○同・店内（夜）

バッティング施設とゲームセンターがあるアミューズメント施設。打席に入り、バットを振っている倫之介。

その後ろ、ネット越しのベンチに座り、煙草を吸っている仙波星良（39）。

倫之介「クレームと俺の私生活は関係ねえんだよ、くそ課長があああ！」

打球は見事にホームランパネルに当た
る。

星良、ぞんざいに拍手しながら

星良「休憩にしないかい？ 倫之介」

星良、ラムネ瓶を見せて振ってみせる。

倫之介、打撃ブースから出てきて、星良の隣りに座る。

星良「いつにも増して荒れてたね」

倫之介「はて、なんのことやら」

星良「ストレス解消になってなによりだ」

倫之介、ラムネ瓶のビー玉を落として

飲む。

倫之介「美味すぎる。青春の味」

星良「四十手前でそう思えるのは幸せな限りだね」

倫之介、回りを見渡すが客は誰もいない。
い。

倫之介「客いなすぎじゃないか？俺のストレス発散場所潰さないでくれよ？」

星良「ご安心を。うちのメインカスタマーは昼間なんだ」

倫之介「さいですか。で、どう思う？」

星良「ゴミ漁りの少女？」

倫之介「二つ名みたいに言うなよ」

星良「お腹空かせて食べ物を探していたんじゃないかって？」

倫之介「可能性としてな」

星良「ゼロではないけど、いくらでも推測は

出来るんじゃないかな。君は学生時代からデフォルトで悲観的だからね」

倫之介「子どもがゴミ袋からパン拾って喜んでたんだ。誰でも心配くらいするだろ」

星良、面白そうな顔で倫之介の顔をのぞき込む。

倫之介「なんだよ」

星良「いや、随分気にかかるなって思ってた」

倫之介「ネグレクトとかだったら洒落にならんからな」

星良「うんうん。君以外の人間が言っていれば私も邪推はしないだけだね」

星良、倫之介の手首につけられている赤いミサंगाをつまむ。ミサंगाは素人が作ったような雑な作り。

星良「娘と年頃が同じでしょ。九歳か十歳かの女の子っていったら」

倫之介「……」

倫之介、星良の手を払う。

星良「詩織ちゃんだったけ。手作りなんだろう、

そのミサंगा。離婚して何年経つかな」

倫之介「今年で、三年だ」

星良「連絡は？」

倫之介「取るわけないだろ。もう新しい父親
だっているんだ。それに……」

星良「それに？」

星良、満面の笑顔。

倫之介、星良を睨んで

倫之介「性格悪いな」

星良「君が引きずり過ぎなんだよ。いい加減、
気を遣うよりも茶化したくなってくるもの
だ」

倫之介「他人事だと思って」

星良「他人事だもーん」

倫之介、沈んだ表情でミサंगाに触れ
ている。

星良、呆れたように笑って

星良「倫之介が悪くなかったとは言わないけ
ど、未練がましくそんなものつけてても、
楽にはならないんじゃないのかい？」

倫之介「……そんなもの求めてない。これはただの、戒めだよ」

星良「真面目だねえ。そういうところ愛してるよ」

倫之介「うるせえよ」

星良「煙草吸ってみるかい？　気が楽になるかも」

倫之介「冗談。身体に悪い」

星良「ラムネの糖分もそこそこ悪いと思うけどね。で、仮にその例の少女がネグレクトだったらどうするの？」

倫之介「通報一択って言いたいけど、星良の言うとおりで、いくらでも推測は出来るからな」

星良「例えば？」

倫之介「間違って捨てちゃったパンを探してたとか」

星良「パンについてる懸賞を応募し忘れたとか？」

顔を見合わせる、倫之介と星良。

倫之介「ないか」

星良「ないね。そもそも団地の子どもかどうかどう
かも怪しいし」

倫之介「ああそうだな、確かに」

星良「まあ人の家庭は多様だからね。深入り
は禁物だよ」

倫之介「……考えてても仕方ない、か」

星良「なんなら、お菓子でもポケットに入れ
ておいたらどうだい？」

倫之介「名案だな」

倫之介、立ち上がって打席ブースに入
り、バッティングを始める。

星良、煙草を吹かしながら倫之介を見
つめて

星良「嫌な予感しかしないなあ」

倫之介、ボールを打ち返す。

倫之介「なんか言った？ 聞こえなかった」

星良「いいや、なんでもないよ」

星良、苦笑しながら灰皿に煙草をねじ
込む。

○ 佐倉団地・外廊下（夜）

扉の前、表札には水西と書かれている。

○ 同・水西家・居室（夜）

薄暗い室内。電気は点いておらず、テレビ画面の灯りと窓からの月明かりだけが部屋を照らしている。

凜子、ひとり部屋の隅で膝を抱えて座っている。

部屋には女物の洋服がずらりと掛かっているハンガーラックと、鏡台には多くの化粧品が置かれている。

凜子、テレビのグルメ番組を見て、お腹を鳴らす。立ち上がり、フラフラとした足どりで部屋を出る。

○ 同・D K（夜）

ダイニングキッチンに入ってくる凜子。冷蔵庫を開けるも中身はカラッポ。

凜子「……」

そばのゴミ袋にはカップ麺などのゴミがまとめられている。

凜子、テーブルに置いてある菓子パンを手取る。菓子パンにはカビが生えている。

凜子「大丈夫……毒じゃない」

凜子、目を閉じながら思い切って菓子パンを開けてかぶりつく。

テレビから流れる笑い声が暗い室内に響いている。

○佐倉団地・駐車場（朝）

トラックから降りて辺りを見渡す倫之介。手にはカロリーメイトを持っている。

倫之介「そんな都合良くいるわけないか」

倫之介、カロリーメイトを胸ポケットに入れてから荷台を開ける。

○同・外廊下（朝）

駆け足で配達にやってくる倫之介。荷札を確認する。荷札には『水西垂矢』と書かれている。

倫之介「水西さん、か。初めて来たな」

倫之介、水西家の部屋のインターホンを鳴らす。待つも反応はない。

倫之介「不在、不在。知ってましたとも」

倫之介が去ろうとしたところで扉が開く。

チェーン付きの扉の隙間から凜子が弱々しい表情で出てくる。

倫之介 & 凜子「あ」

顔を見合わせる、倫之介と凜子。

凜子、気まずそうに顔を伏せる。

倫之介「水西さん、だったんですね。磐田急便です、荷物のお届けにお伺いしました」

凜子「……すみません、ママからチェーンは外しちゃだめって言われてて」

倫之介「構いませんよ。この端末にサインだ

けをお願いします。指で書けるんで」

倫之介、端末を凜子に渡す。

端末を受け取り、サインする凜子。その手は細く震えている。

倫之介、凜子の様子を見つめながら

倫之介「顔色悪いけど、大丈夫ですか？」

凜子、弱々しく頷きながら端末を返す。

倫之介「……じゃあ、荷物は外に置いておくので。あとこれ」

倫之介、胸ポケットからカロリーメイトを取り出す。

倫之介「余計なお世話かもしれないですけど、よかったら」

凜子、カロリーメイトを凝視しながら

凜子「……いえ、いらないです」

凜子、カロリーメイトから眼を離さない。

倫之介「……」

倫之介、カロリーメイトを押しつけるようにさらに見せる。

凜子、生唾を飲み込んでカロリーメイトを見つめてから倫之介を見る。

頷いてみせる、倫之介。

凜子、すぐにカロリーメイトを受け取って取り出し一気に食べる。途中でむせてしゃがむ凜子。

倫之介「おいおいおい、そんな慌てなくても」

凜子、夢中になってカロリーメイトをガツガツ食べている。

倫之介、凜子を啞然と見つめて

倫之介「……マジかよ」

凜子、涙目でカロリーメイトを食べている。

倫之介「あのさ、君の親って」

凜子、ハツとして食べるのをやめる。

凜子「……通報、しないでください」

倫之介「え？」

凜子「お願いします」

凜子、扉を閉めて鍵が勢いよく掛かる音が響く。

倫之介「……」

倫之介、悩む顔で荷物を置いてからその場を後にする。

○同・階段（朝）

険しい顔で腕を組みながら階段を降りている倫之介。

倫之介「そういうわけにも、いかないよな」

倫之介、スマホを取り出して「児童相談所 通報」とワードを入れて検索する。そのまま電話をかけようと画面をタップしようとしたところで

詩織の声「お父さんは結局、自分が一番大事ななんでしょ？」

倫之介、はっとして動きを止める。

○（回想）家庭裁判所・廊下

話している倫之介と藤山詩織（10）。

詩織、倫之介を睨んで

詩織「私のことなんてどうでもいいんだよ。」

自分勝手に投げ出して。だから、何もしてくれなかったんでしょ」

倫之介「……違う、詩織。父さんは」

詩織「（遮って）嘘つき」

詩織、泣きそうな顔で倫之介を睨んでいる。廊下の奥には怒り顔で藤山弘美（34）が立っている。

弘美「詩織、早くしなさい！」

詩織、去り際まで倫之介を睨みながら走って去って行く。

何も言わず、詩織の背中を見つめる倫之介。

○元の佐倉団地・階段（朝）

倫之介、踊り場で立ち止まっている。

倫之介「自分勝手に投げ出して、か」

倫之介、水西家の部屋の方を見ながら、スマホの画面を消して階段を駆け下りる。

○磐田急便営業所・ロッカー室（夜）

倫之介が着替えている。

入ってくる社員 A

社員 A 「あ、藤山さんお疲れー。上がりすか？ 飲みに行きましようよ」

倫之介 「あーすみません、ちょっと寄るところあるんで」

倫之介、駆け足気味にロッカー室を出て行く。

○佐倉団地・駐車場（夜）

来客用のスペースに車が止まる。降りてきたのは私服姿の倫之介。手にはビニール袋に入ったコンビニ弁当を持っている。

倫之介 「親、帰ってればいいんだけど」

○同・外廊下（夜）

水西家の前までやってくる倫之介。
インターホンを押そうとするも手を止

めて迷う。一度深呼吸をしてから思い切ってインターホンを鳴らす。

ドアが開き、チェーンの隙間から顔を覗かせる凜子。

倫之介、笑顔で

倫之介「お昼はどうも」

凜子「……」

倫之介、部屋の奥を覗きながら

倫之介「親は、帰ってなさそうだな」

凜子、警戒心強めの眼で倫之介を見つめている。

倫之介、気まずそうに

倫之介「その、これいるかなって。弁当だけど」

倫之介、ビニール袋を見せる。

凜子、一瞬目を輝かせるもすぐに無表情になり、チェーンの隙間から周りの様子を窺う。

倫之介「俺ひとりだよ。通報もしてないから」

凜子、怪訝な顔で倫之介を見つめてい

る。

倫之介「それでその、良かったらさ、事情とか聞かせてくれないかな。今度でもいいし、そのときもこのままチェーンした状態でいいから」

凜子「話す意味、ありますか？」

倫之介「え？」

凜子「だって、結局は児童相談所とか警察とか、通報しますよね？」

倫之介「かもな。しないうって約束はできないけど、君が嫌だっていうならちゃんと話を聞かないとって思ってるよ」

凜子「どうして？」

倫之介「うーん、通報してはい終わりは、自分勝手な気がしたから、かな」

笑って見せる、倫之介。

凜子「……間違ってますよ、それ」

倫之介「知ってる。だからこれは、ただの自己満足だよ」

凜子「……」

凜子、一度ドアを閉めてからチェーンを外してドアを開ける。

倫之介「おいおい、開けちゃダメなんじゃないかったか？」

凜子「藤山、倫之介さんですよ。誰かわかってるなら、知らない人でもないですから」

倫之介、驚いて

倫之介「なんで、俺の名前」

凜子「前から知っていました。毎日いるしトラックに名前書いてあったんで。それに：一緒にだったからなんとなく」

倫之介「一緒？」

凜子「私、凜子っていいです。水西、凜子。自分の名前、気に入ってるんです。響きが可愛いでしょ」

凜子、薄く笑ってみせる。

倫之介「じゃあ、自己紹介はいらないか」

倫之介、弁当を渡す。

凜子、倫之介からビニール袋を受け取る。中を覗くとコンビニ弁当とお菓子

のポッキーが入っている。

凜子、綻ぶように笑って

凜子「お菓子だ」

倫之介「弁当だけだと色気ないかなって思ってたさ」

凜子、嬉しそうに袋を抱きしめる。

倫之介、凜子を微笑ましく見て

倫之介「えっと、十歳くらいか？」

凜子「まだ九歳です」

倫之介「そっか。その、親はいるんだよね？」

凜子、気まずそうに

凜子「いつもは夕方には帰ってくるんですけど……たまにあるんです。三日か四日くらい長くて一週間くらい間が空くの。食事は最低限用意してくれるんですけど、全然足りなくて」

倫之介、苦い顔をする。

倫之介「今日荷物届いたけど、母親？」

凜子「はい、二人暮らしです」

凜子、外廊下に出て遠くの景色を見つ

める。

凜子「ここ、眺めが良くて好きなんです。引っ越しは何回もしたんですけど、ここが一番好きで。だから通報されちゃうと……」

倫之介「もしかして、その度に引っ越ししてるってことか」

凜子、遠くを見つめたまま黙る。

倫之介「学校は？」

凜子「行ったことないですね」

倫之介「一度も？」

凜子、重く頷く。

倫之介、絶句している。

凜子、倫之介を一瞥して

凜子「やっぱり、私のこと、不幸に見えるんですね」

倫之介、言葉に詰まっている。

凜子「確かに辛いことはあるし、悲しいときもあるけど、今の毎日は楽しいですよ」

倫之介「でも、それは」

凜子「（遮って）大人は私を不幸だって決め

つけて、いづもどこかに連れて行こうとする。それで、可哀想な子どもだって顔で見られます。あれが一番辛いつてこと、絶対にわからないですよ、あなたたちは」

倫之介「……」

凜子「大人は、嫌い。親切なふりして自分勝手な人ばかりですから。振り回されたくないし、同情されたくもない。それなら、放っておいてほしいんです」

倫之介「そう、かもな」

倫之介、腕を組んで複雑な顔。視線は手首の赤いミサंगाに向けられている。

凜子、倫之介を観察するようにしげしげと見る。

倫之介「ん？」

凜子「いえ……これいうと大体怒られたり、ムキになって説得してくる人ばかりだったので」

倫之介「経験豊富だな」

凜子「……児童相談所。電話番号は189で

すよ」

倫之介「嫌なんじゃないのか」

凜子「嫌ですよ。でも、お礼しないとじゃないですか。この数日は、お腹減りすぎて本当に死ぬって思ってたんで」

倫之介「……」

倫之介、ポケットからスマホを取り出しながら

倫之介「児相扱いになれば、少なくとも食べるものに困ったりはしなくなるよ」

凜子「かもしれませんね」

倫之介「それでも嫌なのは、引っ越したくないってだけじゃないよな。母親と離れたくないとかか？」

凜子「半分。でも多分、おじさんが考えているような理由じゃないと思います」

倫之介「どういう意味だ？」

凜子「教える意味、ありますか？」

凜子、冷たく微笑む。

倫之介、悩む顔で

倫之介「……一つ、聞かせてくれ」

凜子「聞くだけでもいいなら」

倫之介「これまで痛いことされたり、殴られたりしたことないか？」

凜子「……ないです」

倫之介「本当だな？」

凜子、頷く。

倫之介「なら、やめだ」

倫之介、スマホをしまう。

凜子「え？」

倫之介「いまの生活がいいなら、そうすればいいってこと」

凜子、啞然としている。

倫之介、財布を取り出して中からテレホンカードとレシートの紙を取り出す。

倫之介「用意しておくもんだな」

倫之介、レシートの紙とテレホンカードを一緒に凜子に渡す。

倫之介「食べるものがないとか、他にも困ったことがあったら、いつでも電話してきて

いいから。まあここには毎日配達くるし、見かけたら声かけるんでもいいよ」

受け取る、凜子。レシートの裏には電話番号が書かれている。

倫之介「ただし約束してくれ。自分の身が危ないと思ったら、いつでも逃げろ。その時は必ず力になるから」

凜子「……どうして？」

倫之介「教える意味、ありますか？」

倫之介、笑って凜子の頭を撫でて去って行く。

凜子「あのっ」

倫之介「まだ何か？」

凜子「これ、どうやって使うんですか？」

倫之介と凜子、黙って見合う。

倫之介「知らないか……テレホンカード」

○同・水西家・居室（夜）

電気が点いていない室内に入ってくる凜子。倫之介からもらったコンビニ弁

当とテレホンカードをテーブルに置く。

凜子「優しい人も、いるんだなあ」

凜子、微笑んでから部屋の姿見に映る自分を見つめる。後ろ脇腹のシャツをめくり、自分の身体を確認する。そこには痛々しい痣がある。

凜子、寂しそうに微笑んでからその場に座り、ポツキーを一本だけ取り出す。

凜子「一日一本」

凜子、一本だけを咥えて勢いよく折って食べる。

凜子「甘い」

凜子、子どもらしく嬉しそうに笑う。

○仙波バッテリーセンター・店内（深夜）

アーケードゲームをやっている倫之介。

その隣りで煙草を吸っている星良。

星良「バカじゃないのか、君は」

倫之介、ゲームをしながら気まずそうな顔で

倫之介「一蹴だな」

星良「一蹴だよ。その凜子ちゃんはまだ単に世の中を知らないだけだろう」

倫之介「それは、そうかもだけど」

星良、呆れた顔で倫之介に煙草の煙をふきかける。

倫之介、咳き込みながら

倫之介「うお、なにしやがる。ああ！」

倫之介、ゲーム操作をミスって、画面にゲームオーバーと表示される。

星良「話を聞いたときから悪い予感はしていたんだけど、ホントいつだって予想のナナメ上を行くよね、倫之介は」

倫之介「俺が出来ることをしたかっただけだよ」

星良「本当に彼女のことを第一に考えている？」

倫之介「……当然だ」

星良「本当に？ 罪滅ぼしをしたいだけじゃないのかい？ かつて自分の娘にした失敗

の償いってやつを」

倫之介と星良、顔を合わせる。

倫之介、先に顔を逸らして

倫之介「……確かに、俺はあの子と詩織を重ねてるかもしれない。けど」

星良「けど？」

倫之介「あいつさ、大人は嫌いだって言ったんだ。多分今日まで辛いこと言われたりして、傷ついてきたんだと思うよ」

星良「想像はしたくないね、煙草が不味くなる」

倫之介「だから俺は、大人にも信用していい人はいるんだってことを少しでも知ってもらいたかったんだ。だって、あの子の人生はこれからずっと続くんだから。電話一本で、投げ出したくなかったんだよ」

星良、天井に向けて煙を吐き出しながら

星良「いつまで？」

倫之介「え？」

星良「いつまで優しくすれば、彼女の心は救われるんだい？」

倫之介「それは……」

星良「そんなものは専門家がすることだよ、倫之介。彼女は君の娘じゃないし、逆も然りさ。一市民の私たちができるのは限られたことだけ。下手に首を突っ込むことで、最悪のケースになることもあるんだよ」

倫之介「……結局、自分勝手ってことか」

星良「倫之介らしくて私は好きだけどね。もし君がどうしても彼女を救いたいというのなら、もっとシンプルにすることだ」

倫之介「シンプルって、そんな簡単なことじゃないだろ」

星良「そうかな。人が人に出来ることはなんなのかという話さ、難しくはない、それこそ世の中の真理でもある」

倫之介、首を傾げる。

星良、笑って

星良「なんにせよ、それで倫之介が救われる

なら私はいくらでも協力しよう。買い物から死体袋の用意までね。いつでも頼ってくれたまえ」

入り口のドアが開き客がやってくる。

星良、煙草を携帯吸い殻に入れながら受付に向かう。

倫之介「……」

ゲーム画面には、コンテニューをするかどうかの選択が迫られている。

倫之介、百円玉を入れてコンテニューのボタンを押す。

○佐倉団地・外廊下

倫之介、荷物をいくつか抱えながら水西家の部屋の前にやってくる。手にはコンビニ弁当が入ったビニール袋も持っている。

水西家のインターホンを鳴らす倫之介。

凜子、チェーンをつけずに扉を開く。

凜子「荷物？」

倫之介「ああ、また来た。で、ついでにこっちも」

倫之介、荷物と弁当を凜子に渡す。

凜子「頼んでないのに」

倫之介「ついでだよ。よく考えたらまとめ買って渡しておけばいいんだよな、また夜に日持ちするもの買ってくるわ」

凜子「……ありがとう。藤山さん」

倫之介「倫之介でいい。あと敬語も禁止な。

お前はとも子供っぽさがなくて調子が狂う」

凜子、嬉しそうに頷く。

倫之介、端末を渡す。

倫之介「こっちサインよろしく。つーか、帰ってこないのに荷物は届くんだな」

凜子「ママ、通販よくする人だから……絶対を受け取れて言われてる」

倫之介「まあ配達人としてはありがたい話だけど、素直に喜べんな」

凜子「毎日、荷物いっぱい持って帰ってるも

んね。いつも帰るときは目が死んでたよ」

倫之介「マジかよ。それ見られてるのは接客的に最悪だな。気をつけないと」

笑い合う、倫之介と凜子。

後ろから大股でやってくる派手な服装の水西亜矢（30）。

亜矢「ちよつとっ、誰あんだ！」

驚く、倫之介。

凜子「……ママ」

亜矢、凜子を睨み付けて

亜矢「あんた、出るときは絶対チェーンしろって教えたわよねっ！」

萎縮する、凜子。

倫之介、凜子を一瞥してから

倫之介「申し訳ございません。磐田急便の藤山です。いまお荷物の配達に伺ったところで、ちょうどお嬢さんとここでお会いしたんです。コンビニに行った帰りだったので、は？」

亜矢、凜子の手の弁当の袋を見て

亜矢「あっそ。あんた金持ってたのね。じゃあ用件は終わりですね、ご苦労様でした」

亜矢、さっさと部屋に入り扉を閉めて鍵とチェーンを乱暴に閉める。

倫之介、口をすぼめながら一礼してその場を後にする。

○同・水西家・玄関

ダイニングキッチンと同室の玄関。

亜矢、玄関の扉に耳を当てて倫之介の足音が遠ざかるのを確認してから、凜子を見下ろす。

凜子「……おかえり、なさい」

亜矢「万引きしたんでしょ、それ」

凜子「ち、違う」

亜矢「ふーん、まあ見つからなきゃ何やってもいいけど、私に迷惑かけないでよ」

凜子、俯きながら頷く。

亜矢、ビニール袋の中を覗いて、届いた荷物ごと奪い、靴を脱いで家に入る。

亜矢「届いた荷物はこれで全部？」

亜矢、ダイニングテーブルに置かれた荷物を見る。

遠巻きに亜矢を見ている凜子。

凜子「……うん」

亜矢、荷物と弁当をテーブルに置く。

亜矢「シャワー浴びよ。これ私が食べるから」

凜子「え」

亜矢、脱衣所へと入っていく。

凜子、テーブルに置かれた弁当を見つめていると、微かにトラックのエンジンが遠ざかる音がする。

凜子、小走りで部屋を出て行く。

○水西家・ベランダ

居室の掃き出し窓から出てくる凜子。

遠目に倫之介のトラックが団地を出て行くのが見える。

凜子、その場で座り込む。

凜子「大丈夫。大丈夫だよ私」

凜子、ポケットからテレホンカードと
レシートを取り出して握りしめる。

凜子「大丈夫」

○コンビニ店内（夜）

買い物カゴを下げ、弁当を手にする

倫之介。

倫之介「さすがに、もう行かなくていいよな」

○（フラッシュ）佐倉団地・外廊下

萎縮する、凜子

○元のコンビニ（夜）

倫之介、弁当を見つめて

倫之介「……あれが久々に母親と会った顔か
ね」

倫之介、弁当をカゴに入れる。

隣りにやってくる母親と娘。

娘「ねえママ、今日夕飯コンビニ弁当にしよ
うよ」

母親「だめ。こんなもの添加物だらけなんだから、子どもが食べるものじゃないわ」

娘「えー、美味しいじゃん」

去って行く親子二人。

倫之介「……添加物？」

倫之介、怪訝な顔でカゴの中の弁当のラベルを見てから、野菜などが売っているコーナーを見て

倫之介「いや無理だろ。無理だって」

倫之介、苦悩する顔で弁当を棚に戻して野菜コーナーへ向かう。

○佐倉団地・水西家・居室（夜）

マニキュアをしながらテレビを見ている亜矢と隅で膝を抱えて座っている凜子。

凜子「ねえママ」

亜矢、凜子を見無視する。

凜子、続けて口を開きかけるもやめる。
インターホンの音。

亜矢「はいはい」

亜矢、部屋を出て行く。

凜子、焦った顔で立ち上がる。

凜子「倫之介」

○同・水西家・D K（夜）

ダイニングキッチンと同室の玄関から
入ってきたのは男A。

応対している亜矢。

男A「外寒いねえ、雪降るかもってよ」

亜矢「それが一時間遅刻の言い訳？」

男A「悪い悪い、メシ買ってきたからさ」

亜矢「やった、お寿司じゃん」

凜子、ほっとした顔で亜矢と男Aを居
室から覗いている。

男A、凜子に気付いてギョツとする。

男A「うわ、ビビったあ！ 子ども？」

凜子、おそるおそる居室から出てくる。

凜子「……こんばんは」

亜矢「余計なのが一人いるって言ったじゃん。

あ、でも気にしないでいいよ」

男 A 「聞いてないよ、亜矢ちゃんの子ども？」

亜矢 「お互い酔っ払いながら話してたしねえ、まあ昔の話だからさ」

男 A 、戸惑った顔。

亜矢 、男 A の顔色を窺ってから凜子に

亜矢 「あんた、外行ってな」

凜子 「え……いまから？」

亜矢 「そうだよ、朝まで帰ってくるな」

亜矢 、凜子を引っ張って玄関まで無理

矢理連れて行く。

為すがままの凜子。

亜矢 、玄関で凜子に耳打ちする。

亜矢 「絶対誰にも見つかるなよ。特に警察。

補導なんてされても迎え行かないから。わかった？」

凜子 、重々しく頷く。

亜矢 、凜子を追い出すように外に出す。

○同・外廊下（夜）

追い出される凜子。扉が閉まり、鍵とチェーンが掛けられる。

亜矢の声「これで邪魔者はいない。お寿司食べよ」

凜子、扉を見つめている。

風が吹き、身震いする凜子。上着は着ていない。トボトボと歩いてその場を後にする。

○マンション・外観（夜）

ファミリー向けの中規模マンション。

○マンション・藤山家・キッチン（夜）

倫之介、包丁を握ったままキッチンを眺めている。雑に切られた野菜やタコさんウインナーにしようとしたウインナーの残骸、焦げて真っ黒になった卵焼きなどグチャグチャの光景。

倫之介、自嘲気味に笑って

倫之介「はいはい、知ってたよ。そもそも弁当箱ねえし。もう持って行く必要もないかもしれないし。やーめたやめた」

倫之介、包丁を置いてから固まる。

倫之介「今日のメシ、ないじゃん俺」

スマホの着信音。

倫之介、スマホを見ると画面には公衆電話とある。

倫之介、眉間に皺を寄せながらすぐに電話に出る。

倫之介「もしもし？」

○道（夜）

佐倉団地に近い電話ボックス。中の公衆電話から電話をかけている凜子。

倫之介の声「もしもし」

凜子「……こんばんは」

倫之介の声「何かあったか？」

凜子、白い息を吐き出しながら寒がるように身を抱いて

凜子「使えるか、確認しておこうかなって」

倫之介の声「確認してお前」

凜子、遠目にパトカーの赤い灯りを見て

凜子「それだけ。じゃあね」

凜子、受話器を置いてテレホンカードを取り、急いで電話ボックスから出る。

○マンション・藤山家・リビング（夜）

電話している、倫之介。

倫之介「おい、もしもし？ 切りやがった」

倫之介、スマホの画面を見るも時間は八時を回ったところ。

倫之介「……いや、親帰ってきてるし。さすがに」

倫之介、棚に飾ってある写真立てを見る。写真は倫之介と詩織、弘美三人の家族写真。

○（フラッシュ）佐倉団地・外廊下

萎縮する、凜子

○元のマンション・藤山家・リビング（夜）

倫之介、家族写真を見つめている。

倫之介「……」

倫之介、電話をかけながら部屋を出て行く。

倫之介「星良か。悪い、頼みがある」

○道（夜）

佐倉団地が見える通り。道沿いにある

公衆電話の前に車が停まる。

出てきたのは倫之介。

倫之介、電話ボックスの中を見るも誰もいない。辺りを見渡す。

倫之介「くそ。電話ここくらいしかねえよな」

車が行き交うなかにパトカーが通り過ぎる。

倫之介、焦るように辺りを探す。

○別の道（夜）

茂みの中でしゃがみ俯いている凜子。
唇は青く、吐き出す白い息も少なくな
っている。

凜子「お腹減ったなあ……」

凜子、ゆっくりと目を閉じる。

倫之介の声「いた、おいっ！　大丈夫か？！」

凜子、はっと目を開けて誰かも確認せ
ず反射的に逃げる。

倫之介、凜子の腕を掴んで捕まえる。

凜子「嫌っ、離して！　離して！」

倫之介「落ち着け！　俺だ、俺」

凜子、我に返って倫之介を見る。

倫之介「探してよかった、わかりにくいところ
いやがってもう」

凜子、ほっとした顔になるもふらつき
倒れかける。

凜子を支える、倫之介。

倫之介「何があった？」

凜子「……散歩、したくなっちゃってさ」

倫之介「そんな薄着でか」

凜子、気まずそうに俯く。

倫之介、不機嫌な顔で一度団地の方を一瞥してから

倫之介「……車あっちに停めているからうちに来い。身体、氷みたいだぞ」

頷く、凜子。

倫之介、凜子を抱えて車に向かう。

○マンション・藤山家・リビング（夜）

ソファに座っている倫之介。

浴室から風呂に入っている音がしている。

倫之介、スマホのナンバー画面で189を押している。通話ボタンを押せば電話がかかる状態。

倫之介「……」

星良の声「邪魔するよ」

倫之介、スマホの画面を閉じる。
紙袋を下げてやってくる、星良。

倫之介「悪いな、店もあるのに」

星良「なんでもするって言っただろう。くだんの女子は風呂かい？」

倫之介「……ああ」

倫之介、ソファに背中を預ける。

星良、倫之介のそばのスマホを見て

星良「通報は？」

倫之介「……落ち着いてからと思って。風呂入って、メシ食わせて」

星良「優しいね。自分の優しさに苦悩する男は魅力的だ」

倫之介「それバカってことか？」

星良「伝わったようで何より。では、私は頼まれたことをしようかね」

倫之介「頼む。さすがに俺がやるのは気が引けるからな。絵面的にもさ」

星良「そうだね。少女の下着を買ったり、風呂に侵入したりしたら、私以外の全世界を敵に回すところだったよ」

星良、不敵に笑いながらリビングを出

て行き、脱衣所の部屋に入っていく。

星良の声「初めましてえ、凜子ちゃん」

凜子の声「えっ！　誰ですかっ！」

星良の声「私と一緒に楽しもうじゃないか」

悲鳴混じりの黄色い声が聞こえ、苦笑する倫之介。

○同（夜）

凜子が不満げな顔で星良にドライヤーで髪を乾かしてもらっている。

それを眺めている、倫之介。

棚に飾ってある家族写真の写真立ては見えないように伏せられている。

星良「すっかりご機嫌ナナメだね。ごめんよ」

倫之介と星良、顔を見合わせる。

星良、苦笑しつつも重く頷く。

倫之介、沈痛な顔で

倫之介「とりあえず、無事で良かったよ」

凜子「……」

倫之介「さっそくだけど、身体の痣のこと聞

いいいいか？」

凜子、後ろの星良を批判の眼で見つめる。

星良、微笑みを返しながら、ドライヤーを終えてブラシで凜子の髪をとかす。

星良「補足するなら、痣は新しくはなかったよ。治りかけていたから最近のものではないのかな」

倫之介「どうして嘘ついた？」

凜子「……」

倫之介「って聞くまでもないか。言ったらさすがに俺でも通報してたよ」

凜子「殴られるのはたまにで……彼氏と別れて、お酒飲んでるときくらいだから」

倫之介、苦々しい顔で

倫之介「それでも、母親とは離れたくないのか」

凜子「うん」

倫之介「半分、って言ってたよな」

凜子「……」

倫之介「俺に教える意味は、まだないか？」

凜子、倫之介を見る。

倫之介、真剣な表情で凜子を見つめて
いる。

凜子「……私ね、泣かないって決めてるの。
大人に頼らないで一人でも生きられるよう
に。でもそれってすごく大変で……なんで
毎日こんなにお腹って減るのになって悲し
くなるくらいで」

凜子、両手をぎゅっと握りしめる。

眉間に皺を寄せて聞いている倫之介。

穏やかな顔で凜子の髪をとかしている

星良。

凜子「だからね、上手く言えないけど、ママ
には辛いことされたり言われたりすること
たくさんあって、でも、私をここまで育て
るのって大変だったんだろうなと思うの。
ママのことは……好きでも嫌いでもない。
でも、それだけでもなくて」

星良「感謝があるのかな」

凜子「なのかな……ママは多分私のこと嫌い
だけだね。昔は勉強もつきっきりで教えて
くれて、優しくしてくれたこともあったん
だ。だから、だからね。嫌われてても……
育ててくれたお礼っていうか、私に出来る
ことがあるなら、何かしてあげたいって思
うの。ずっと一緒にいた家族だから。だか
ら、気持ち半分」

倫之介「……家族か」

星良、凜子の髪をとかし終えて頭を優
しく撫でる。

凜子「でも、もういい」

倫之介「え？」

凜子「もう倫之介には迷惑かけたくないから。
今日私一人だったら本当に死んじゃってた
かもしれないしね。ママとはこれっきりに
する。その方が……ママもきつと喜ぶよ。
だから、通報していいよ。ありがとね」

凜子、寂しげに微笑む。

倫之介、ため息をつく。

倫之介「お前な……それ聞いて、簡単にわかりましたって言えるわけないだろ」

星良、声を出して笑う。

星良「凜子ちゃん、あまり悩ませてあげないでくれ。あれは昔から体育会系のくせにあれこれと考える質なんだ」

凜子「二人は、昔から友達なの？」

星良「ああ、元恋人さ」

倫之介「高校の時の話な」

凜子「じゃあ元カレと元カノ？」

星良「そうそう。ちなみに振ったのは私」

凜子「どうして？」

星良、凜子の耳に口を寄せて

星良「男としてよりも、人として好きになりすぎちゃったのさ」

凜子「なにそれ？」

倫之介、うんざりした顔で立ち上がる。

倫之介「まあとりあえずメシ食いに行こう。これからどうするかはそれからだ。ファミレスでいいだろ」

凜子「え、いいよ。別にお腹減ってないし」

凜子のお腹が鳴る。

凜子、恥ずかしがってお腹を押さえる。

倫之介「俺が減ってるの。付き合ってくれよ」

凜子「……なら、仕方ないね」

星良「私何か作ろうか？ 外寒いじゃん」

倫之介「いやいや、お前、酒のつまみしか作れないだろ」

星良「失礼だね、それでもすごく家庭的だと元恋人に恐れられたものだ」

倫之介「恐れられてるじゃん。それ言ったの俺じゃないからな」

星良、キッチンの方へ向かう。

倫之介、はっとして

倫之介「あつ待て、今キッチンはっ」

星良、キッチンを見て悪い笑みを浮かべてから凜子を手招きする。

凜子、星良に歩み寄ってキッチンを見る。

キッチンには倫之介が弁当作りに挑戦し

た残骸で酷い有様。

星良「凜子ちゃん、お弁当の要望があったら
伝えた方がいいよ」

凜子「んー、タコさんウインナーは子どもっ
ぽいかも」

星良と凜子、顔を見合わせて笑い、倫
之介を見る。

倫之介、がっくりと肩を落とす。

○同・藤山家・玄関（夜）

靴を履いている凜子と後ろからその様
子を見ている星良。

凜子「仙波さんは行かないの？」

星良「私は店を開けるからね、食事が終わっ
たら来るといいよ」

凜子「大人のお店？」

星良「いいや。みんな子どもだったと思い出
せる店さ」

凜子、首を傾げる。

星良、凜子の頭を撫でて

星良「私のことは是非、星良って呼んでおく
れ」

凜子「わかった」

笑い合う、凜子と星良。

奥から倫之介が子ども用のダウンを持
ってやってくる。

倫之介「ほら、これ着ろ。そんな薄着じゃす
ぐに身体冷えるぞ」

凜子、受け取って

凜子「これって、家族の？」

倫之介「あー……昔のな。もういないんだ」

凜子「子ども、いたんだ」

星良、呆れた目で倫之介を見る。

倫之介、星良の視線に気付いて気まず
そうに

倫之介「星良、ここの鍵、頼むぞ」

玄関をさっさと出て行く倫之介。

凜子、渡されたダウンを見つめて

凜子「着て、いいのかな」

星良「ごめんね。変なところで気を遣うくせ

に、大事なところは雑な男なんだ。気にすることはないよ」

星良、凜子からダウンをとって

星良「はい、袖通して」

凜子、戸惑いながらもダウンを着させてもらう。

凜子「……あったかい」

凜子、振り返って

凜子「ありがと、星良。ドライヤーも気持ち良かった」

星良「またいつでもしてあげるさ」

凜子、手を振りながら出て行く。

星良、閉まった扉を見つめて

星良「……助けなくなるわけだね」

星良、悲しげな顔で微笑む。

○ファミレス（夜）

一般的なファミリレストラン。客の数はまばらで空いている。

店内へ入ってくる倫之介と凜子。凜子、

キヨロキヨロしながらも目を輝かしている。

倫之介、やってきた店員に

倫之介「二人で」

店員「お好きな席にどうぞ」

倫之介「だってさ。窓側にするか？」

倫之介、凜子を見る。

凜子、浮かれていた顔を慌てて澄ました顔に戻して

凜子「どこでもいいけど、窓側いいかもね、外が見たいわけじゃないけど」

倫之介、笑みを浮かべ窓側の席に行く。
ついていく凜子。

○同・テーブル席（夜）

窓側の席で向かい合って座っている倫之介と凜子。

凜子「ねえ、もう星良のこと好きじゃないの？」

倫之介「好きじゃねえよ。二十年も前の話だ

ぞ」

凜子「でも星良は倫之介のこと、好きな気がする」

倫之介「どうだかな」

倫之介、話を終わらせるようにメニュー冊子を強引に凜子に渡す。

倫之介「ほら、好きなもの頼んでいいから」

凜子、メニューを受け取り、一ページまた一ページとめくって、目を輝かしている。

その様子を頬杖ついて見ている倫之介。
凜子、倫之介の視線に気付き、照れ隠しでメニューをテーブルに立てて顔を隠す。

凜子「ドリンクバーもつけていい？」

倫之介「ああ、いいよ」

凜子、ページをめくってまた戻してを繰り返す。

倫之介「迷ってるなら二つ頼めよ。俺が片方にすればシェアできるだろ」

凜子、メニューを少し倒して倫之介をチラ見する。

倫之介、頷いてみせる。

凜子、メニューを倒して

凜子「じゃあ、このチーズインハンバーグ、ライス付きと和風パスタで！」

倫之介、店内タブレットをとって操作しながら

倫之介「今日、渡した弁当にハンバーグ入ってたろ。別の方がいいんじゃないか？」

凜子、一瞬固まるも

凜子「また食べたいの。あれも……美味しかったけどね」

倫之介「まあコンビニとはまた違うか」

凜子「うん……違うよ」

倫之介、タブレットで注文し終えて

倫之介「じゃあ飲み物取りにいくか」

倫之介、席を立つ。

凜子、慌てて後に続く。

○同・ドリンクバー前（夜）

ドリンクバーでコーヒーを入れている
倫之介。

凜子、ドリンクバーのジュース機にグラスを置くも操作がわからない様子。

倫之介、ジュースの好きなボタンを押すことをジェスチャーで教えると、凜子は照れを隠す顔ですぐにボタンを押すも少ししか出ず、また首を傾げる。

倫之介、ボタンを長押ししてドリンクを出し続けてみせると、コーヒーを持つて席に戻る。

凜子、悔しそうにボタンを長押ししてジュースを出す。

○同・テーブル席（夜）

窓側の席でコーヒーにミルクを入れて
いる倫之介。

遅れて恥ずかしそうに戻ってくる凜子。

倫之介「ちゃんと入れられたかい？ お姫様」

凜子「余裕だよ、テレビで見たことあったし」

倫之介、笑みを浮かべてコーヒーを飲む。
む。

凜子、ふくれっ面でメロンジュースを一気に飲んでむせる。

倫之介、布巾を取りながら

倫之介「おいおい。大丈夫か、詩織」

失言に固まる倫之介。

凜子「詩織？」

倫之介「あ、いや」

凜子、傍らに置いてあるダウンを見て

凜子「これの持ち主か。女の子？」

倫之介「ああ……離婚してな」

凜子「会ったりしてないの？」

倫之介「嫌われてるんだ。もう会うことはないだろうな」

凜子「それが私に優しくしてくれる理由？」

倫之介、沈痛な顔で

倫之介「それは……」

凜子「いいよ別に。でも、私に教えてくれる

意味は、もうあるよね？」

凜子、笑いかける。

倫之介、言いにくそうに

倫之介「詩織は……離婚したあとは俺と一緒に住みたいって言ってたんだよ。しつめに厳しい母親よりも俺によく懐いてたんだ」

凜子、倫之介の手首の赤いミサンガを見つめている。

凜子「……」

倫之介「けど、俺にはその気がなかった。適当に約束して守らなかったんだ。正直、うんざりしてたんだよ。毎日の仕事に加えて裁判とか親権とか、早く終わってほしかった。全部……どうでもよくてさ」

凜子「詩織ちゃんは、私と同じくらいの子？」

倫之介「当時な。いまはもう中学生だよ」

凜子「じゃあこれは、もう小さいんだね」

凜子、ダウンにそっと触れる。

倫之介「その、さっきはすまん。けど、俺はちゃんとお前のことを考えて」

凜子「（遮って）わかってる。家族に嫌われるのって、寂しいもんね」

倫之介「……そうだな」

凜子「倫之介のは自業自得だと思うけど」

倫之介「違うない」

笑い合う、倫之介と凜子。

料理をのせた猫の顔をした機械がやってくる。

凜子「なにこれ、可愛いいい！」

倫之介、顔を綻ばせる。

○仙波バッテリーセンター・店前（夜）

店前の駐車場に車が止まり、下りてくる倫之介と凜子。

凜子、施設を見つめて

凜子「ここがみんな子どもだったって思い出せる場所？」

倫之介「あいつは子どもに何を言ってるんだか。まあどんな場所かは入ればわかるよ」

倫之介、先導する。

ついていく凜子。

凜子、倫之介の手を見つめて袖をつまもうとするも、その手首についているミサंगाを見て、手を引っ込める。

倫之介、ふと凜子を見て

倫之介「どうかしたか？」

凜子「ううん、なんでも」

凜子、倫之介を追い抜いて入り口へと入っていく。

倫之介、首を傾げながら後に続く。

○同・店内（夜）

入ってくる倫之介と凜子。

店内を見て目を輝かしている凜子。

凜子「すごい！」

倫之介「相変わらず、人いないな」

星良、受付カウンター内から

星良「ようこそ。迷える人々の楽園へ」

倫之介「何言ってるんだ、お前」

凜子「知ってるっ、野球でしょ？ それにゲ

ームセクター。百円玉で動くやつ。あとこ
れはガチャガチャ」

倫之介「まあ野球といえど野球だな」

星良「凜子ちゃん。倫之介は昔、野球選手だ
ったんだよ」

凜子、驚愕の顔で倫之介を見る。

倫之介「部活でやってただけだ」

凜子「なーんだ、びっくりした」

倫之介、頬をひきつらせる。

倫之介「なんかそこはかたなく貶された気が
するな。なんなら勝負するか？」

凜子「やる！ バッドに当てるだけでしょ」

倫之介「ははー、言ってる」

それぞれ打席ブースに入る倫之介と凜
子。

星良「大人げないぞー」

○同（夜）

それぞれ打席に入ってバットを振って
いる倫之介と凜子。

その後ろのベンチに座り、眺めている
星良。

凜子「全然当たんないっ！」

凜子、バッドを振るが空を切る。

倫之介「やっほーい」

倫之介、ホームランを打つ。

凜子、飛んで来た球にまたバッドを振るがかすりもしない。

倫之介「あっははは、楽しい！」

倫之介、再びホームランを打つ。

凜子、悔しそうに倫之介を指さして星良を見る。

星良「ああ見えて高校の時は一番上手かったんだよ。ちなみに私はマネージャーでね、甲子園に連れて行ってもらっちゃった」

倫之介「そのネタ、今の子どもは知らないぞ」

凜子、またバッドを空振りする。

倫之介、凜子の打席ブースに移って

倫之介「初めてバッド持った奴が打てるほど甘くないんだよ」

倫之介、凜子の後ろから抱くようにして凜子の手の上から一緒にバッドを握る。

凜子、ハッとして手の上から握られた倫之介の手を見つめてから、嬉しそうにバットを強く握る。

倫之介「真っ直ぐしか飛んでこないんだから狙って打てばっ」

一緒にバッドを振る、倫之介と凜子。

打球はボテボテのゴロだが、バッドに当たる。

凜子、両手を見て

凜子「ビリビリきた！」

倫之介「楽しいだろ、ほら来るぞ」

また一緒にバッドを振るも今度は空振り、二人してこけて声を出して笑う倫之介と凜子。

星良、ネット越しに倫之介と凜子が楽しんでいる姿を見て、スマホのカメラを向ける。

星良「まるで親子ね」

○同・休憩室（夜）

畳敷きの小さな和室。

凜子が簡易ソファの上で寝ている。倫之介、毛布を凜子の上にかけてから部屋を出て行く。

○同・店内（夜）

受付カウンターの中で煙草に火を付けている星良。

倫之介、奥から出てくる。

星良「寝たかい？」

倫之介「ああ。寝顔は普通のお子様だな」

星良「何に憂うこともなく、全力で遊んだのは初めてなのかもしれないね」

倫之介「……かもな」

星良「どうするんだい？」

倫之介、悩む顔でスマホを取り出すも動かない。

倫之介「この前、人が人に出来ることはなんなのか、って言ってたよな」

星良「言ったね」

倫之介「無力過ぎて嫌になるよ。俺には、あいつに出来ることがなにもない。結局先延ばしにしてるだけだ。最悪だよ」

星良、煙草の煙をゆっくりと吐き出す。

星良「倫之介、私は君が好きだよ」

倫之介「なんだよ、急に」

星良「だから君のことは大切にするんだ。君が困っているなら、泣いているなら、どこへだって駆けつけよう。間違っているならそれを言葉にして伝えようってね」

倫之介「ああ、助かってるよ」

星良「君は凜子ちゃんを、どれだけ大切に思っているんだい？」

倫之介「……」

星良「それだけさ。そばにいる人をどう愛せばいいのか。たったそれだけで、世の中はちゃんと回るものさ」

倫之介「詩織にもそれが出来ていたら、何か変わっていたのかもな」

星良「そうだね。ならなおのこと、考えることだ。人の愛し方はそれぞれだから。通報するもよし、誘拐するのもし」

星良、倫之介に笑いかける。

倫之介「簡単に答えをくれないのは、相変わらずだな」

星良「悩んでいる男は魅力的に映るものなのさ。男にこの幸福はわからんだろうね」

倫之介「煙草、一本くれ」

星良「おやおや、いいのかい？」

倫之介「デビューするには良い案件じゃないか？」

星良「ふむ。ボールを打ち返すことがいかに健全なストレス解消だったかだね」

星良、自分が吸っていた煙草を渡す。

星良「私の重いから、このぐらいにしておく
といいよ」

倫之介「どうも。外で吸ってくる」

倫之介、火の点いている煙草を受け取って外に出て行く。

星良、倫之介の背中を見つめてから思いついたように自分のスマホを操作する。

○同・店前（夜）

店入り口前のベンチとその隅には据え置き
の灰皿が置かれている。

倫之介、ベンチに座りながらおっかなびっくりで煙草を吸ってみるもむせる。

倫之介「おえー、なんだこりゃ」

倫之介、ベンチの背に寄りかかり夜空を見つめる。曇天模様の空には月明かり
すらない。

倫之介「……どう愛するか」

○（回想）マンション・藤山家（夜）

凜子、俯きながら

凜子「……私ね、泣かないって決めてるの。」

大人に頼らないで一人でも生きられるように。でもそれってすごく大変で……なんで毎日こんなにお腹って減るのになって悲しくなるくらいで」

○（回想）ファミレス・テーブル席（夜）

向かい合って話している倫之介と凜子。

凜子「家族に嫌われるのは、寂しいもんね」

○元の仙波バッテリーセンター・店前（夜）

ベンチに座り、空を見上げながら煙草を吹かしている倫之介。

倫之介のスマホが鳴り、画面には星良からの動画送信。

倫之介、訝しげに動画を再生する。

動画は、さきほどの倫之介と凜子がバツティングを楽しんでる様子。

倫之介と凜子の笑い声が響く。

倫之介、思わず笑顔になって

倫之介「俺に、出来ることか」

倫之介、動画の中の笑っている凜子を見つめて、煙草を灰皿に入れてから立ち上がる。

○同・店前（朝）

チラチラと雪が降っているなか出てくる凜子。

凜子「わぁ、雪だ！」

凜子の後が続いて出てくる、倫之介と星良。顔を合わせる。

星良「凜子ちゃん」

手招きをする星良。

はしゃいでいる凜子が走り寄ってくる。

星良、促すように倫之介を見る。

凜子、察して寂しそうに俯く。

倫之介、大きく息をついて

倫之介「あのさ」

凜子「……うん」

倫之介「一度、母親と会わせてくれないか？」

凜子、驚いて顔をあげる。

凜子「え？」

倫之介「協力できることはあると思うんだ。行政の手続きとかちゃんとすれば補助金とかも出るだろうし、そうすれば、学校にも行けるよ。話をさせてほしい」

凜子、ポカンとしている。

凜子「いまさら学校なんて、勉強ついていけないよ」

星良「それなら私が教えるから大丈夫だよ。

こう見えても高学歴なんだ」

凜子「でも」

倫之介「もしも話がまとまらなければ、児童相談所に連絡する。けどそのあとでも、俺はこれからもお前と向き合っていきたいと思ってる。一人の人間として、俺に出来ることをさせてほしい」

見つめ合う、倫之介と凜子。

倫之介「前に言ってたよな？俺は、お前が不幸だとは思わないよ」

凜子「……」

倫之介「でも、もっと求めてほしいと思ってる。学校に行って、友達と遊んで、勉強して、お洒落して、美味しいもの食べて、もっと笑ってほしいんだ」

凜子「……」

倫之介「ダメかな？」

凜子「倫之介はさ……私のことを」

倫之介「ん？」

凜子、自分の着ている詩織のダウンの腕を握りしめる。

凜子「ううん。なんでもない」

星良、凜子の様子を心配げに見ている。

凜子、笑って

凜子「変な大人だね、倫之介は」

倫之介「会わせてくれるか？」

凜子「いいけど。ただママ、すごく難しい人だから、協力とかは無理だと思う」

倫之介「そこは頑張るよ。お前の望みは出来る限り尊重したいしな。一緒に暮らせるならそれが一番良いんだろ？」

凜子「……ありがとう」

倫之介、ほっとしたように胸をなで下ろす。

倫之介「そのうえでだけど、何かしたいこととかあるか？ 欲しいものとか。そういうのがあると交渉っていうか、話しやすいんだが」

凜子「ないかなあ」

倫之介「もうちょっと考えてくれよ。何かあるだろ」

凜子「急に言われても、欲しいものとかずっと考えないようにしてたし」

子どもの楽しそうな声が聞こえ、道路を挟んだ反対側の歩道を見る凜子。

歩道には集団登校する小学生が歩いている。

凜子「……そういえば、保育園の先生に聞かれたことあったな。凜子ちゃんは、何色のランドセルがいいのって」

倫之介「なんて答えたんだ？」

凜子「青。明るい空みたいな色。二人は何色だった？」

倫之介「俺は普通だ。黒」

星良「私は黄色だったよ、学校でただ一人のね。あれは心が踊ったな」

星良、不敵に笑う。

倫之介、呆れた顔で星良を見る。

凜子「いいなあ。ランドセル、ちよっと楽しみだったんだ。ちよっとだけね。学校行けるなら、ランドセルは憧れかも」

倫之介「わかった。学校は行けるよ、ランドセルだって俺が買ってやる」

凜子「……本当に？」

倫之介「ああ、約束する」

凜子「私が学校か。嘘みたい」

凜子、嬉しそうに微笑む。

倫之介と星良、笑って顔を見合わせる。

倫之介「仕事終わったら迎えに来るから、それまでここにいろよ。いいだろ、星良」

星良「もちろん。看板娘は大歓迎だ」

倫之介「いや、働かせるなよ」

凜子、吹き出すように笑って

凜子「それも楽しそうだけど、一回帰る。いきなり倫之介たち連れて行ったらママも驚いちゃうだろうし」

星良「難しい貴婦人なんだろう。ここにいいいよ、遠慮することはない」

凜子「ありがと、星良。でも大丈夫。もしかしたらママと二人で話すのは、これが最後になるかもしれないから」

倫之介と星良、顔を見合わせてから

倫之介「わかった。でも、最後になんかならないよ、話せばわかってくれるさ」

凜子「うん」

○佐倉団地前（朝）

チラチラと雪が降るなかで車が停まり、降りてくる凜子。

倫之介、車内から

倫之介「本当にここでもいいのか？」

凜子「大丈夫。またあとでね、倫之介」

凜子、手を振って走り去っていく。

倫之介、凜子が見えなくなるまで背中を見つめて

倫之介「仕事、遅刻だな」

倫之介、車を発進させる。

○佐倉団地・外廊下（朝）

やってくる凜子。部屋の扉の前で深呼吸をしてからドアを開けるも鍵は掛かっている。

凜子、中へ入る。

○同・水西家・玄関（朝）

玄関と同室のダイニングキッチン。

扉を開けて入ってくる凜子。三和土に

は、亜矢のハイヒールの靴しかない。

亜矢、ダイニングテーブルで突っ伏して寝ている。

凜子「……ただいま」

凜子、起こさないように忍び足で靴を脱いで部屋に入る。
凜子、周りを見るも男Aの姿はなく、食べかけの寿司がテーブルに置いたままになっている。

○同・D K（朝）

キッチンで洗い物をしている凜子。
ダイニングテーブルで突っ伏して寝ている亜矢。肩には毛布が掛けられており、テーブルには残っていた寿司が皿にまとめられラップがかけられている。
眼を覚ます亜矢。

凜子、気付いて

凜子「ママ、おはよう」

亜矢「……」

亜矢、身体を起こして肩の毛布が落ちる。何も言わず酒瓶とグラスを取り出して酒を飲みはじめる亜矢。

凜子、毛布を拾いながら不安そうに亜

矢を見つめて

凜子「あの、ママ。話したいことあつて」

亜矢、グラスを煽りながら凜子を一瞥して

亜矢「……何？」

凜子、亜矢が反応してくれたことにほっとした顔。

凜子「会ってほしい人がいるの。私たちのこ
と色々手伝ってくれるって言ってくれてて、
それで、私、学校に行きたいんだ」

亜矢「……」

亜矢、酒を煽りながら床に畳んで置いてある詩織のダウンを見る。

凜子「家のこともしっかりするし働いてるママをこれからも助けるよ。だから、だから
ね」

亜矢、グラスを手に立ち上がり、ダウンを取りに行く。

凜子「ママ？」

亜矢「これなに？」

凜子「それは」

亜矢「あんた私を買ってやったの着ていかなかったよね？　その会って欲しい人からプレゼントされた？」

凜子「……いや、プレゼントじゃなくて」

亜矢「クソガキのくせに、もう頼る男がいるわけか」

凜子「そういうんじゃない……なくて、倫之介について、私と同じ名前の」

亜矢、グラスを凜子に向かって投げる。
グラスは凜子の額に当たる。

額を押さえてうずくまる凜子。頭から血が垂れるも凜子は悲鳴ひとつあげない。

亜矢「ごちゃごちゃ、ごちゃごちゃ」

亜矢、歩み寄ってうずくまる凜子を蹴っ飛ばす。

凜子「うっ」

亜矢「私を助けるって？　笑わせないでよ、子連れなんて聞いてないってあのくそ男、

そう吐き捨てて出て行ったよ。誰のせいだよっ！ 全然助けてないじゃん」

亜矢、凜子を再度蹴っ飛ばす。

凜子、痛みに耐えて

凜子「……ごめんなさい」

亜矢「父親はわからないし、金にかかるしすぐ熱出すし、やっと放っておけると思ったら？ 今度は男を作る邪魔になる。どうなってるの？ これ」

亜矢、ふらつきながら自虐的に笑う。

凜子、床にうずくまっている。

凜子「ごめんなさい、ごめんなさい」

亜矢、凜子を見つめる。

亜矢「私にそっくりだよ、あんた」

凜子「……え？」

亜矢「弱くて、惨めで、一人じゃ生きられなくて。でも私とは違う。私は、あんたとは違う」

亜矢、凜子の胸ぐらを掴みあげる。

亜矢「学校に行きたいんだっけ？」

凜子「無理に、とは」

亜矢「行けないよ。あんたはどこにも行けない」

亜矢、見下すように笑う。

凜子、亜矢を見つめながら額から血が流れていく。

○佐倉団地・駐車場（朝）

駐車スペースに停められたトラック。

倫之介、後方の荷台を閉める。雪はすでに止み、地面には薄らと雪が積もっている。

倫之介、公園で何組かの親子が雪で遊んでいるのを、微笑ましく見つめてから団地の方に顔を向ける。

倫之介「やっぱ、配達前に一回挨拶行っておくかな」

倫之介、上階の階段から大きなスーツケースを持って降りてくる亜矢を見つめる。

倫之介、走り寄る。

○同・階段前（朝）

やってくる倫之介と階段から降りてくる亜矢。

倫之介「どに行くんですか？」

亜矢、怪訝な顔で

亜矢「は？」

倫之介「すみません。藤山倫之介と申します。

お嬢さんからお話しを聞いてませんか？

今日、ご挨拶に行こうと」

亜矢、嘲笑した顔で

亜矢「あー、まさかの配送員の人だったんだ。

ちよつとロリコン過ぎませんか？ さすがに

犯罪ですよ」

倫之介、亜矢の持っているスーツケースを見る。

亜矢、倫之介の視線に気付いて

亜矢「あー、死体が入ってるのか思ってる？

ただの私物ですよ。あの部屋にはもう帰ら

ないから」

倫之介「帰らないって……」

亜矢「アレなら部屋に転がってるんで、欲しいならあげますよ」

亜矢、倫之介の脇を抜けようとするも
倫之介に前を塞がれる。

倫之介「ちょ、ちょっと待ってください。それ、自分の娘のこと言ってるんですよね？」

亜矢「他に何があんのよ」

倫之介「あんた、それでも」

亜矢「（遮って）親かって？」

亜矢、倫之介を睨んで

亜矢「望んでなったわけじゃない。いまは死ぬほど後悔してるよ。悪い？」

倫之介、拳を強く握る。

倫之介「あいつが、どれだけ母親のことを」

亜矢「知らないよそんなの。私だって、この十年ひとりで精一杯やってきたんだよ！子守はもううんざり。自分を一番に考えることの何がいけないのよ」

倫之介、亜矢を嫌悪の顔で見る。

亜矢「何よ……偽善者ぶってさ。あんただってどうせ自分のためにあいつに優しくしてらんでしょ？　百パーセント献身で優しくしてますって言えるわけ？」

倫之介「それは」

倫之介、言葉を止める。

亜矢、嘲笑して

亜矢「とんだ変態じゃん。気持ち悪い」

亜矢、倫之介の脇を抜けるも振り返って

亜矢「そうだ、良いこと教えてあげる」

倫之介、亜矢を睨むように振り向く。

亜矢「あいつ、戸籍ないから」

倫之介「……は？」

亜矢「出生届出してないの。病院の証明書も捨てた。学校なんて行けないよ、書類上死んでるのと同じだもん」

倫之介、呆然としている。

亜矢「面倒でしょ？　いらなくなったら」

倫之介「（遮って）言っていないよな？」

亜矢「は？」

倫之介「それ、あいつに言っていないよなっ？！」

亜矢、無機質な顔で倫之介を見る。

倫之介、階段を駆け上っていく。

亜矢「……」

亜矢、上階を一度見上げてから、ゆっくりとした動作で去って行く。

○同・外廊下（朝）

倫之介、慌てて走ってやってくる。水西家の扉を開けようとするも鍵が閉まっている。

倫之介「くそ」

倫之介、インターホンを鳴らす。

応答がなく、倫之介がもう一度インターホンを鳴らそうとしたところで扉が開く。

出て来たのはお腹を押さえている凜子。

額には乾いた血の跡、頬には殴られた跡があり、詩織のダウンを着ている。

倫之介、言葉なく唇を噛む。

凜子、ぎこちなく笑って

凜子「産まなきゃよかったって言われちゃった。ずっと邪魔だったんだって。はは、ま
いっちゃうよね」

倫之介、しゃがんで凜子と視線を合わせる。

倫之介「すまん、俺が間違ってた。すぐ病院
に行こう。これからのことは」

凜子「（遮って）倫之介、私のこと誘拐して
よ」

倫之介「え？」

凜子「学校行きたいとか言わないからさ。私、
役に立つよ？ 掃除とか洗濯とか、料理は
……練習すればきつと」

倫之介「おい、何言ってる」

凜子「（遮って）娘の代わりでもいいから、
詩織って呼んでもいいからっ！ だから、

私のこと……見捨てないで」

凜子、懇願する眼で倫之介を見つめる。

倫之介、何も言えずに凜子の額の傷に
触れようとする。

凜子、反射的に倫之介の手を払って怯
えるように

凜子「ごめんなさいっ！」

驚く、倫之介。

凜子、はっと我に返って。

凜子「……なーんて、ね」

凜子、ぎこちなく笑って

凜子「はは、嘘嘘。全部嘘だよ。誘拐も冗談。

私は大丈夫。全部わかったことだもん。

ママは、私のこと嫌いだって。だから、だ
から」

倫之介「お前、こんなときまで強がらなくて
いいって」

凜子「強がってないっ！」

凜子、倫之介を力づくで追い出すと扉
を閉めて鍵をかける。

凜子の声「聞いたんでしょ。私、普通の子じゃなかった！ 学校にはいけないんだよ」

倫之介、扉越しに

倫之介「戸籍のことだな。大丈夫だ、方法はいくらでもあるから」

凜子の声「でも、普通の子どもじゃない、それじゃあ、詩織の代わりにはなれない！」

倫之介「さっきから何言ってるんだよ。代わりになんてなくていい。お前はお前の」

凜子の声「じゃあなんで私の名前、一度も呼んでくれないのよっ！」

倫之介、はっとする。

○同・水西家・玄関（朝）

凜子、玄関の扉に背を預けたままずり落ちるように座る。

ポケットからテレホンカードを取り出し見つめると叩きつけるように捨てる。

凜子「……倫之介のせいだよ。ずっと、ずっと一人でも頑張ってきたのに、こんなこと

なら何も知らないほうが良かった。何も知らないまま死にたかったよ。なんで、なんで優しくしたの？ 倫之介もママも大人は誰も、誰も私のこと見てないっ！ 大人は勝手だ、みんな勝手だっ！ 嫌い嫌い嫌い嫌いっ、みんな大っ嫌い！」

凜子、頭を抱える。

○同・外廊下（朝）

倫之介、扉の前でしゃがんでいる。手を強く握りしめ、声をかけようとする。

凜子の声「疲れた」

足音が遠ざかる音。

倫之介「おい！」

倫之介、焦って立ち上がり扉を叩く。
ノブを回すも鍵がかかっている。手首のミサंगाが視界に入る。

倫之介「また、繰り返したのかよ」

倫之介、弱気な顔になるも、歯を食いしばって自ら頭を額に思いつきりぶつ

ける。もう一度、強くぶつける。

倫之介「冗談じゃない……」

倫之介、ミサंगाを掴み、強引に引きちぎる。

扉を蹴り破ろうと助走をつける倫之介。
寸前で隣りの部屋の扉が開く。

住人B「あの、どうされました？」

倫之介、住人Bを見つめる。

○同・水西家・ベランダ

凜子、ベランダの柵を乗り越えて立っている。白い息を吐き出しながら遠くを見つめる。

凜子「……」

○（フラッシュ）ファミレス（夜）

倫之介と凜子、笑いながら一緒に食事している。

○元の佐倉団地・水西家・ベランダ

柵を乗り越えて立っている凜子。

凜子「……楽しかったなあ」

凜子、一度振り返り、部屋の中の玄関の扉を見つめて泣きそうになる。

覚悟を決めたように目を閉じて息を吸い込む、凜子。

隣りのベランダから姿を見せる倫之介。

倫之介「飛び降りかよ……行動力あんな」

凜子、はっとして隣りを見て涙目で倫之介を睨む。

倫之介、凜子と同じように柵を乗り越える。

倫之介「こっちからの眺めも悪くないんだな」

凜子「……」

沈黙する、倫之介と凜子。

倫之介「ごめん。俺は確かに娘と重ねてたよ。

お前を助ければ、あのときの失敗を取り返せるんじゃないかって……本当に、自分勝手の救えないボケカスだった」

凜子「……私のこと、見てくれてないって思った」

倫之介「ああ、ごめん。名前を呼んでなかったとか、言われるまで気付かなかったよ。挙げ句の果てに、詩織って呼んじまう始末だもんな。ホント最低だ。でも、これだけは信じて欲しい。お前のこともちゃんと見てた。これは、本当だ」

凜子「……嘘だよ」

倫之介「嘘じゃない」

凜子「もう放っておいてよ！ 倫之介にはわかんないよっ！ 私が毎日どんな思いで生きてたと思ってるの。それでも頑張ってたのに、なのに、私には戸籍がなくて、最初から生まれてもなかったっ！ そんなの死んだって何も変わらないっ！」

倫之介「凜子っっ！」

はっとする、凜子。

倫之介「俺は自分のことばかりでさ、毎日をダラダラと生きてたんだ。だから、必死

に生きている凜子を見て心底自分が恥ずかしくなったよ」

倫之介、凜子に手を差し出す。

倫之介「すごいよ、頑張ったんだよな。そんなお前のこれまでの時間が、なんにもないわけではないだろ。凜子、お前はここにいる、ちゃんと生きてるよ」

凜子、唇を噛んで泣くのを堪えている。

凜子「……もう無理だよ。一人は寂しい、ずっと寂しかった。辛い、もう我慢なんてできないうっ！」

倫之介、あからさまにため息をついてみせて

倫之介「この馬鹿っ」

凜子、むっとして

凜子「馬鹿ってなによ！」

倫之介「馬鹿だよ、この馬鹿凜子」

倫之介、笑って

倫之介「なんで我慢するんだよ。しなくていい。散々したんだ。何がしたい？ 何が欲

しい？　本当はたくさんあるんだろ、言ってみろよ」

凜子、倫之介を見つめる。

倫之介、頷いてみせる。

凜子「スマホ、欲しい」

倫之介「はは、そりゃ欲しいよな。よし、一番新しいの買いに行こう。そしたら、いつでも電話できるよ」

凜子「……学校行きたい」

倫之介「そうだったな、行こう」

凜子「ランドセル欲しい」

倫之介「青いの買ってやる」

凜子「友達、欲しい」

倫之介「出来るよ、学校に行けば人気者だ」

凜子、涙を一筋流して

凜子「家族が……欲しい」

倫之介「ああ、俺もだ」

凜子、倫之介に手を差し出す。

倫之介、一気に詰め寄って隣のベランダに移動して凜子を抱きしめる。

凜子、倫之介を抱きしめ返す。

凜子「……私、詩織にはなれないよ？」

倫之介「ならなくていい。一緒にいれば家族だ。俺がすることは、それだけでよかったんだ」

凜子、倫之介にしがみつきながら大声で号泣する。

倫之介、柵に掴まりながら凜子を片手で強く抱きしめる。

○佐倉団地・郊外

スーツ姿の女性に連れられていく凜子。

倫之介、穏やかな顔で凜子を見ている。

凜子、振り返って女性と話してから駆け寄ってくる。

倫之介「どうした？」

凜子「ちゃんと、謝ろうと思って」

首を傾げる、倫之介。

凜子「その……嘘だからね、倫之介に会えてよかった。優しくされたこと本当は嬉しか

ったから。全部、全部大事にする」

倫之介「そんなことか。突き返されても何度でも届けるよ。俺の普段の仕事、知ってる
だろ」

凜子「じゃあ、再配達してくれますか？」

倫之介「いいですよ。時間指定は？」

吹き出すように笑う、倫之介と凜子。

凜子「なしで！」

凜子、踵を返す。

倫之介、凜子の背中に向けて照れながらも

倫之介「またな、凜子」

凜子、足を止めて振り返る。

倫之介「会いに行くよ」

凜子、泣きそうになるも笑って

凜子「聞こえなかった」

倫之介「会いに行くって」

凜子「そっちじゃない」

倫之介、ため息をついて

倫之介「凜子」

凜子「もう一回」

倫之介「おい……もういいだろ」

凜子「もう一回っ」

倫之介、照れながら

倫之介「凜子」

凜子、嬉しそうに笑う。

倫之介、微笑んで

倫之介「良い名前だな」

凜子「知ってるっ！」

凜子、満面の笑顔で去って行く。

車に乗り込み、車内からも倫之介に手

を振る。

車が見えなくなるまで手を振り返して

いる倫之介。

後ろからやってくる星良。

星良「やあ」

倫之介「うわ、びっくりした。着いてたなら

声かけろよ、もう行っちゃったぞ」

星良「ちょっと微笑ましすぎてね。私にも再

配達してくれる？」

倫之介「お前には何も届けてない」

倫之介と星良、去っていった車の方を
見つめて

倫之介「……俺はあいつの、凜子のことをち
ゃんと見てなかったよ。詩織のときもそう
だ。二人とも、大切だって思ってたはずな
のに」

星良「伝わらなきゃ意味がないよね」

倫之介「まったくだ」

倫之介、ポケットからちぎれた赤いミ
サंगाを取り出す。

倫之介「伝えなきゃいけなかったんだよな。
言葉じゃなくても、手を握るだけでもよか
った。お前の言うとおりだよ、することな
るってそれだけでよかったのに、俺は詩織に
何もしなかった。もう謝る機会もない、一
生の後悔だ」

星良「いつか会えるかもしれないさ。その来
るかもしれないいつかまで、振り返られる
ようになればいい。それが、思い出ってい

うものだろう」

倫之介「……ありがとな、星良」

星良「違う言葉が欲しいね」

倫之介、照れた顔で

倫之介「愛してる」

星良「私もだ」

吹き出して笑う、倫之介と星良。

倫之介のスマホの着信音が鳴る。

スマホの画面を見る倫之介。

倫之介「うわ、課長だ」

星良「説教？」

倫之介「まだ午前便一つも捌けてないからな。

まっ今からでも余裕で間に合うよ」

去って行く、倫之介。

星良「倫之介」

倫之介「ん？」

星良「いい顔してるよ」

倫之介「知ってる」

倫之介、清々しく笑って駆ける。

星良、その背中を見送りながら煙草を

取り出して火を付けて空を見上げる。

曇天の雲の隙間からは日差しが入り、
青い空が顔を出している。

星良「良い天気だ」

星良、微笑む。

○児童福祉施設「すずらん」・外観

T・七ヶ月後

園庭を備えた小さな施設。

強い日差しが照る中、蝉の鳴き声が鳴り響いている。

○同・室内

二段ベッドと二つの机がある室内。

机で一人、刺繍糸でミサンガを一生懸命苦戦しながら作っている凜子。椅子には詩織のダウンがかけられており、口にはポッキーを一本咥えて食べている。作業をしながら続けてもう一本、ポッキーを食べる。

凜子「よし、出来た！」

凜子、完成した青いミサंगाを掲げて
微笑む。

開いたままの窓からトラックの音が聞こえ、窓の外に身を乗り出し笑顔になる凜子。部屋を出て行くが、すぐに戻ってきて完成したミサंगाを手にとってまた出て行く。

インターホンが鳴り、引き戸が開く音がする。

机の上の写真立てには、小学校の前で青いランドセルを背負った凜子とぎこちない顔の倫之介が手を繋いでいる写真が飾られている。

タイトル「凜として咲いた名前は」

「了」